

おとなのつみ の わくわく

先人、嘗て、文彦など、王父が誠語ありて語られける、「およそ、事業も、みだりに興をもとあるべからず、思ひさだめて興をもとあるべからず、遂げばもやまじ」の精神あかるぶからず」と語られぬ。おのれ、不肖よとあれど、平生、おの誠語を服膺を。本書、明治八年起稿してより、今年よいたりて、はじめて刊行の業を終へぬ。思へぞ十七年の星霜あり、「おふる、過去経歴の跡ともぞ、おほかたに書ひつけ、後のおりひでよせむと見む人、そのへたへしめを笑ひな生る。明治七年、おのれ、仙臺にありば、あと、その前年、文部省のおほせをなづけたまひて、その地よ宮城師範學校といふを創立し、校長を命ぜられて在勤せしをりありけり。おふる、おの年の末よ、本省より特々歸京を命ぜられて、八年二月二日、本省報告課（明治十三年よ、編輯局と改められぬ）に轉勤し、おたはじめ、日本辭書編輯の命あり。あれぞ本書編輯着手のじめありける。時の課長は西村茂樹君をらす。

その初は、榎原芳野君とともに、編輯のおほせをかうむりたりしに、幾ほどあらず。榎原君と他ようつりて、おのれひとりの業をもありぬ。後に聞けば、初め、辭書編輯の議おもれる時、和漢洋を具微せる學者數人、召しあつておられたの計畫にて、おのれも、那珂通高君の薦めあつたとか聞きつる。又あれよりまことに、編輯寮よて語彙を編輯せしめられしに、碩學七八人して、一一一年の間に、わづかに「あ、い、う、え」の部を成せりき。横山由清君もそのひとりありしが、再舉ありと聞かれて、意見をのざされける。語彙の編輯、議論よのみ日本を以て成功をかりき、多人數をらむよりぞ、大槻一人よまかせられたらむとぞ、却て全功を見るおどあらむ」といそれたりをあり。此事、横山君の直話もありて、後に、清水卯三郎君、おのれよ語られぬ。此業の、おのれひとりの事をあれど、かかる由にてやありけむ。

初め、編輯の體例と、簡約あるを旨として、收むべき言語の區域、またも解釋の詳略なども、およそ、米國の「エブスター」氏の英語辭書中の「オクタボ」といふ節略體のものよ徵みしむ。おのれ、命を受けつるはじめ、壯年銳氣よして、おもへらる、「オクタボ」の注釋を翻譯して、語じことづめゆかむ。おの業難からずとおもへり。あれより、從來の辭書體の舊數十部をあつめて、字母の順序をも、また古今雅俗の普通語をおもふかぎりを採收分類して、解釋のありつるを併せて取りて、その外、東西洋おもじ物事の解も、英辭書の注を譯しておしされり。かくするおど數年よして、通編を終て、さて初よからて、各語を逐ひて見てもゆけむ。注の成れるを夙く成りて、成らぬこ成らば、語のみあるしつけて、その下は空白をありて、老人の歯のぬけたらむやうある所、一葉ごと五七語あり。古語古事物の意の解きがひざむの、説のまちへあるもの、八品詞の標別の下しがたざむの、動詞の語尾の變化の定めかねるもの、假名遣の據るとなおむして順序を立てがたきもの、動植物の英辭書の注解を據りたりしもの、仔細よ考へわくれば、物と同じけれども、形狀色澤の、東西の風土よよりて異なるもの、其他、雜草、雜魚、小禽、魚介、さても、俗間通用の病名などもいたりては、支那よもあく、西洋よもあく、邦書よも徵をぐるまきが多し。かく、一葉毎よ、五七語づゝ、注の空白をあれど、あれぞ此編輯業の盤根錯節とはあらねる。筆執りて机よ臨りどる。いたゞらよ望洋の歎をおおとのみ、言葉の海のたゞあかよ櫻緒絶き、ひづれなかざだめかね、たゞ、その遠く廣く深きおおむねて、おのがまおびの波を耻ぢ責むるのみあり。ひづれても、興せる業を已びざむあらず。王父の遺誠よもありと、更よ氣力を奮ひおちして、及ぶがおおざり引用の書をあつめ、又有識よ問ひ、書る就き、人よ就き、およ求め、かしあよ質して、おほかたよも解釋し、旁、又、別よ一業を興して、數十部の語學書をあつめ、和洋を參照折中して、新よみがわき文典を編み成して、終よその規定よよりて語法を定めぬ。おの間よ年月を徒費せしもと、實よ豫想の外よし、およそ本書編成の一

年月も、私の盤根錯節のためよつひやせること過半なりき。(あの間は、他書の編纂校訂を命ぜられ、又、音樂取調掛兼勤となりしあと數年なりき。) 解釋をあなぐれる事よつまく、そのひとつおたつを言ふむ。 某語あり、語原つまびらかあらず、外國語あらひのうたがひあり。或人、偶然よ「そぞ、何人か、西班牙語を識らむ」をいふ、さらばとて、西英對譯辭書をもとむれを得ず、「何某あらモ西班牙語を知らむ」君その人を識らぞ添書を賜へ、一とて、やがて得て、その人を訪ふ、不在あり。おた、ひ訪ひて遇へり、「おのれは深くは知らず」さらば、君が識れる人は、西語よ通せる人やあらむ。 某學校よ、その國の人やあらむ。 某學校よ、その學校よゆき。 遂よその語原を、知るみを得たりき。 捕吏の、盜人を蹤跡する詞よ、「足がつく」足をつける」といふおとあり、語釋の穿鑿も相似なりと、ひとり笑へる事ありき。 その外、酒宴談笑歌吹のあひたよも、ゆくりあく人のちとぞの、ひと耳よきより籠めつる多かり。

おのれも漢學者の子で、わが家學を受け、また王父が蘭學の遺志をつきて、いかか英學を攻めつるのみ、國學としてもさらば師事せしとおもふ。受けたるをおろおろく、たゞ、おのが好きとて、そおぞとの國書を覽わなしつるまでもあり。さう思へば、そのはじめ、かゝる重き編輯の命を、お受けあへる。さうすうけたまわりつるものか。辭書編輯の業、碩學をもあやめるも、あれありけりと思ひ得たるはうなづく。初の銳氣、頗るくじけて、心そよろよ畏れを抱くはじりぬ。また、局長はも、おのが業のはからぬを、いかよか思ふるむ。怠り居るとや思ひをもんね。おどおもふも、そも、局長西村君も、そのはじめ、おの業をおのれる命せられてより、ひなしき歲月をわざれるよ。さういは、いかよと問はれし事もあく、うあがされし事もあし。その意中推しはかりかねて、つねよはづかしく思ひり。なるよ。明治十六年の事ありき。阿波の人井上勤君、編輯局に入り來られぬ、同君、さう局長の會それし時よ、局中は學士も濟々たらむ。何がし、くられがし、と話しあざれど、局長のいはるゝに、「あゝ、ひとり、奇人もそあれ、大槻のあはがしこいよ。おの人、雜駁ある學問あるが、本邦の語學も、よくあらむ」とあるやうあり。かねて一大事業をまかせてより、今はや十年よ近き。なほ、倦まずして打ちかゝりあり。強情なる士なむぞ」と、話されぬと、井上君入局して後よ、ゆくなくおのれよ語られぬ。おのれ、あの話を聞きて、局長の意中も、さて、と感激し、また、その「強情を云々」の月日、おのが立てつるすちを洞見せられたりけり。「人の己を知らざるを憂はず」の格言もおれなりなを思ひて、うれしおふるもありありき。げよや、そのがみの官衙のありとあらむ、傍忽よ變遷をる事ありて、局も人も事業も、十年の久しきは繼續せしも、希有なる事よて、おのがおの業も、都下熱鬧の市街のおひたすありて、十年の間、火災よ焼けのおりたらむがごとき思ひあり。そもそも、この業の成れるも、おのが強情などいふもおわけなし。ひとよ、局長が心のよせひとりよ成りつるなりけり。西村君も、實はおの辭書成功の保護者（Patron.）をや言えまし。

そのかみを、官途も、今のかくもあらず、奉承榮達の道も、今よりそ、なはやすかりきとおぼゆ、同僚も、時めきて避れるも多し、おのれよ親しく榮轉を勧めた  
りし入さへも、ひとりふたりよまへらざりき、されど、かゝる事よて、心の動く時も、つねに王父の遺誠を眞目一思しぬ。明治十一年六月、おのが父よておは  
きる人、七十八歳よして身はかられぬ、老い給ひての上の天然の事ともいへ、じよきもの事よて、哀しきもとがざりむし、今よりも難義の教を受けむともかな  
はずと思へば心ほぞし、辭書の成稿を見せまわせむの心ありしかども、そのかひもあし、あの後幾度とある事ありき、同郷ある富田鐵之助君、龍勤よ在

勤せられど、來遊をよかし。おのれじかくして扶持せむ。ほど厚意もこよひおあせられたり。君の我を愛せらるゝたゞ、今まにじめの事もがいが眞喜踏躡し、かく思へば、かゝる機會が多く得べからず。父の養ひがたゞ終へて、おのれと次子あり、家兄ハ存せり。家の祀、母のやしあひ、耗をきめんゆゑ、おのれをかむ。子もあし、幾年かしめおなば、海外は遊びてゐられた程へおなば、ひきおなむ青山るむ。海外にて死るもせむ。おらう、おの士も、何とか一事業をもとめてゆかむ。その業は、あるばおの辭書あるより、ひよへ一半途ましと口くわざかおなば。かく思ひあひし。かく、その頃、おのれと本郷に住む、父を養ふむるは篤ひづる。雇用あひむ、かる事の用ひをあひ、おれ鹽をいみ給はじ。思ひ思ひあたまて、おおど、そを賣くし、一千餘金を得、おおど蓄餘を出しとし、腰纏をも、のべて、かく、ひきおなむ辭書の成業をじせむ。おれども、例の盤根錯節と、たゞやせく解けやむ。今おおじむだらじと、推辭せむか、躲避せむか、棄てじ。棄てじの念、幾らびか胸中ゆひ、かひむ、おれど、かく思ひあつて、例の遺誠を思ひ出で、思ひえりぬ。かく心のみはやかじ、おへんかく日をもとせる内、當時、楮幣洋銀の差大々起つて、備へつる腰纏は、思ひばかりせぬ。幾程か、富田君も歸朝せられ、ひよへ一呆然うか。おじおぞの願望を一睡妄想の夢とひ醒められ。おのれ、おの辭書編輯十年間は、おのれが旺壯の年期ありしを、おんくおの事業の犠牲となはれつた。善く世と推しうつてゐるが、かくから沈淵をわざひなむ。今は已みあむ。然あれど、又つらへ人の上を顧みあるゆ、時めかしつる。變遷しゆる。相乘除せ、あるて繰言を以へゆあらじ。おじお、笑義を繼きつる上、おの文學の道はかくとおひが。おのれが分あり。おのれが分あり。おのれが分あり。世の操觚の人も、史文も、詩語もとかく、花も實もあつて、聲聞利益を博せむ方々のみ就へ。おのれは、かく至難の一と人後つて、利を得て、おのれ木わむ半生をつづつる。迂闊ある境涯ありけり。おれど、おの業、文學の上、誰か公用あらすとせば、公用ある業あれど人と棄てゝ就かず。おのれは人の棄てつる業は殆ぜり。かく、お本分は醜いとおもひゆくとおせむかー。

本篇引用の書はござりとも、謹みて中外古今碩學がたまのを拜す。實は皆その辛勤の餘澤あり、家よ藏せる父祖が遺著遺書のあとみざる少からず。編輯中の質疑はいかんじと、黒川興顯、横山由清、小中村清矩、柳原芳野、佐藤誠實等諸君の教、謝しおもふとある。然して、稿本成りて、名を言海とつけられしバ、佐藤誠實君の考選といひ。稿本の序書をはじめつる。明治十五年九月、局中、中田邦行、大久保初男の二氏を主の編輯はつけられ、校字寫字は、おほかんおの二氏の手に成れり。さて、初稿成れりし後も、常に訂正と從事して、その再訂の功を終へるが、實は明治十九年三月二十一日あり。

さて、局長西村君は、前年轉任せられ、おのれ、十九年十一月、第一高等中學校教諭、古事類苑編纂委員など移りて、本書出版の消息をきく所ある。ひとと、故文部大臣森有禮君の第に饗宴ありし時、おのれも招かれて、宴過きて後に、辻新次君と鼎坐して話したるをつゝ、「君が多年苦心せる辞書、出版せはや」とおど。大臣、親しく言ひじたる事もありしが、編輯の拙さ、出版はたゞとるや、或は資金の出所もしそうや、その事も止み。かく、稿本を文部省中じて、久しく物集高見君が許に管せられしむが、いかよかあらひ。さてへて、ひきおなむ紙魚のすみがどめゆきむこと、思ひひでる日もあらむたゞ、明治二十一年十月にひよへて、時の編輯局長伊澤修一君、命を傳へられて、自費をもと刊行せざるが、本書稿本全部下賜せらるゝ事ある。かかるに、おおど国外の命をひよだれり。思典、枯骨の肉をのぞめざる。まあおち、私財をかまねつて資本をあらば、富田君の助言、及び

同郷なる木村信卿君、大野清敬君の賛成もあつて、いよ／＼心を強うし、躍躍して恩命を拜し。かくて編輯局の命より、かるらず全部の刊行をばたえし、刊行の工事は同局の工場に托すべし、篇首に、本書を、おのれ文部省奉職中編纂のものたるふとを明記せし。そおほくの獻本を以し、あといふ約束を受けて、十月二十六日、稿本を下賜せられ、やがて、同じ工場にて、私版として刊行をさめたるゝあり。

刊行のはじめ、中田大久保の二氏、閑散ありしかず、家にやとして、活字の校正せむとを托し。稿本も、もじめも、初稿のまゝにて、たゞちに活字に付せむの心にて、本文のはじめある數頁を、實にそのごとくまたりしが、數年前の舊稿、今にいたりて仔細に見てもぬけぞ、あかぬ所のみ多く出できて、かるねて稿本を訂正する事をし、校訂塗抹をされ、二氏淨書してたゞちに活字に付し、活字を、初より一回の校正とさせだめたれど、一版面、三人して、六回の校正をもあらぬ。さてより、今年の落成にいたるまで、一年半の歳月を、世のまじらひをも絶ちて、晝とあく夜とあく、たゞおのの訂正校合にのみ打ちかゝつて、更に他事をかへりみず。さてまた、篇中の體裁も、注釋文も、初稿とて大に面目をあらためぬ。

本書刊行のはじめに、編輯局工場と約して、全部、明年九月に完結せしめむと豫算したり。又、書林も、舊知ある小林新兵衛、牧野善兵衛、三木佐助の三氏に發賣の事を托せしに、豫約發賣の方法よからむとす、めらるゝまたがひて、全部を四冊にわかつて、第壹冊と三月、第二冊と七月、第四冊と九月中に發行せむと假定し。すると、此事業、いかある運にか、初より終まで、つねに障礙にのみあひと、ひとつも豫算のじとくあるもとあたらず、遂に完結までに、一年半をつひやせり。今、左はその障礙のいちにじるせるのを述べる。

明治二十二年三月よりたゞて、編輯局の工場を、假に印刷局よつけられたるよにして、その事務引きつきのためなどて、數十日間、工事の中止をあひ、さて、二十三年三月よいたゞて、編輯局の工場を、終よまたく廢せられぬ、あれより後も、一私人として、さらり印刷局よ願ひひやすくあるとす、その出願にも、規則の手續を要せらるゝ事ありて、豫算にたがへる事もなきしかば、編輯局よつれしまつを事ともありしかど、今とせむかたもしきと御けられぬ、稿本下賜の恩命もあれば、さひて違約の愁訴もあかねて、それより、家兄修二・佐久間貞一君、益田孝君などの周旋を得て、とかくの手づゝをして、からうじて再着手となり、此の間も、中止せられぬなど、六十餘日に及び。又、おのの前後、公用刊行の物輻湊見る時も、なれが工事も、さしづかれたる事もあははありき、かく、數度の障礙にとあひつれど、おのの工事を他の工場に托せむの心を起らざりき。同局の工事を、いわまでもある事ながら、植字よ校正よ、謹嚴精良ある事、麻姑を雇ひて磨處を搔くが如く、また他にあるべくあらざれりあり、見む人、本書を開きて目止めよかし。さてまた、本書植字の事、原稿の上にとどき、さすがとも思えざりしが、さて着手となりてみれど、假名の活字も、異體別調のものあれば、寸法一々同じからず、その外、くるべの符號も、全版面に、なよそ七十餘とほりのつかひわけあり、植字校正のわづへとしきあると、熟練のうへにとどまかせらす、いかに促せどもす、また、母型に無き難字の、思ひのほかに出できて、木刻の新調にいとまをつひかせる事甚多し、およそ、あれらの事、豫算にと思ひもまうけの事あるにて、あれど、母型に無き難字の、思ひのほかに出できて、木刻の新調にいとまをつひかせる事甚多し、およそ、あれらの事、豫算にと思ひもまうけの事あるにて、もとて遲延の事由とあります。又校正者中田邦行氏、脳充血にて、一十二年六月に失せられり、本書の業につきとす、その初より、大久保氏とあるが、助力をほめたまはず、多年、篇中の文字符號に熟練せる人を失ひて、うと／＼あうじぬ。また、去年の春、流行性感冒行され、年の末より今年にかけて、また、ひ行され、たのれど、校正者も、植字工も、おのの前後再度の流行に、數日間倒れり、また、去年の十月、おののが家、壁隣の火に遇へり、また、校正者大久保初男氏、その十一月、徳島縣中學校教員に赴任せられて、たのめる一臂を失ひて、いよ／＼あうじぬ、およそあれらの事、皆此書の遭厄あり。

あれより後も、先人の舊門なる文傳正興氏に托して、校正の事を擔任せしむ。

遭厄の中に、もとより堪へがたく、又成功の期にむかひて、大にあの業をなすたけり。たのれが妻と子との失せつる事あくまく、爰ども不用ふるあり、くだくだしきれども、たのれの身に取りて、おのの書の刊行中の災厄といふもの後の思ひでとならひ事あるべかられど、人の見る目見る恥ぢを記しつけおかむとす。去々年十一月に生れたる我が次女の「みみ」といふ、生れてよりうとうとおちやがありしが、去年十月のむつかむかより、感冒して、後に結核性脳膜炎とされり。醫高松氏が病院よ、妻小婢(ひし)と共に托せしむ。病性よからずして心地悪やかしけ。朝夕に行きて、いたゞして顔がゆめり、歸りてと筆を執れども、心もおもひて、十一月十六日の、まだ宵のまゝ、さうに原稿の「心」の部を訂正し、等のおし手の「ゆしあんをひく」のねじかうまきしたり、おどじふ條を推考せらるゝ。小婢、病院よりおせかへりて、家に入りて、物をもひだすそのまゝ、打伏し聲立て、泣く、病の危篤あるを告ぐるなり。筆をあはんが、蹶起しよしりゆけば、煩悶しつゝ、かゝて事切れむ。泣く、扇をじたまし家なかへり。床よ安し、おめやかよ青き燈の下よ、勉めてゐる、び机よ就けは、稿本を開きて故の如し、見れば、源氏の物語、若菜の巻、琴はかくも彈せ取り給ひつらば、云々、書といと人まかへ、なほ、ひとたびも廻さんする。心云々、じよいつくし、彈せ給ふ。おひま御極よ、おしゃうておし給ふ御手つば。じよいつくしられば、おのが思ひなしよや、讀むよえたて机おしゃり、おの夜一夜、おのが胸を、ゆしあんせられて夢を結はむ。死るし子、顔、よかわい」おんな子のためよ、親、おなじくなづかし」など、紀氏の書のあれたりつるを、おなじ思ひるおどもあらしが、今も、我身の上なり。宜なり、なぞ思ひなり。おの小兒の病よ心を痛めつるや、打ちつけめが、家のうちよ、母よおなれる人よおじめとして、病よ困るの、五人よおよび。妻なる「じよ」なむのなかる。ひとり、かひぐしく人々の看病してありしが、妻も、遂よおの月のまゝつかだより病よ臥し、初も、何の病をもみとめかねたる。數日の後、腹室扶斯なきとの診断をうへ、おどひひまし。本郷なる大學病院よ移して、また、晝よ夜よゆきかよひて病をみ、病のひまをかひして、歸へりて校訂の業よ就けざる。心もよよあらが、洋醫「ペルシ」氏も心をつむられけれど、遂よ十二月廿一日よ二十歳よよはかなくなり。いかなる故よてかかる病よおもづかひむ、年頃善く母よ事、我よ事、おの頃の我が辛勤を察して、よそながら、いたく心をいため、また、家政の苦慮を我よおもづかじと、ひどり思をなやかしてまかひつゝありける状なりしよ。子のなまめかず、添へつれは、それら、やうへ身の衰弱の種よなづつむ。わいだ、子の失せつる、衰弱せる母の乳よやめむつらむ。今、今の苦境も後よううか笑ひつ、語らはむ、なぞかたひたりしよ。今もその語だ出であおぞ袖の露ある。寝を掩ひて寝に就けや、角枕よまた柔たり。そも、かゝるめ、しくおぢめがゆく、さうへんじう書いつけおかむと、人わらされぬわざとが、おちがましまじかがれども、おの頃の筆硯の苦、人情の苦、窮屈大が難中の苦、渾合しつる事あらが、後よおの書を用ひむひとと、おのれども思ひやうじせむども、讀まむ人も、おなれども見ゆるし給へ。

辭書と文典のもとめたるおど。論するまでもあし、その編輯功用の要を。あの序文にくはしければ、さらにも言をす。されば、文部省にても、夙くよりその業に着手せられぬ。語彙の擧る、明治の初年にあり。その後、田中義廉、大槻修二、小澤圭一郎、久保吉人の諸氏に命ぜられて、漢字の字書（本邦普通用の漢字を三千ばかりに限らひて採收解釋せるもの）と普通の日本辭書とを編せられつる事もあり。ある、明治五年より七年にかけての事あり。さて明治八年にいたりて、おのが言海を命ぜられぬ。世をやうへ文運にそみたり、辭書の世に出でつるも。今をひとつあたつあらす。明治十八年九月、近藤眞琴君の「おとほのその」發刊とあれり。二十一年七月に、物集高見君の「おとほのわらし」、二十二年一月に、高橋五郎君の「いろは辭典」も刊行完結せり。近藤君も、漢洋の學に通明におそきものから、その教授のいそがとしきひとに、かゝる著作ありつるは、敬服をべきだとなり。あの著作の初に、おのが文典の稿本を借してよどありしかば、借しまるらせつれば、やがて全部を寫されたり。されば八品詞その外のわかちなども、おのが物と、名目おそはいさゝかかとりつれ、そのまちも、おほかた同じじなかとなれり。そのかみ、君をはじめとして、横山由清、榎原芳野、那珂通高、の君たちに會ひまあらせつるじとに、「辭書といかに」と問えられたる。成りたらむだともおもと思ひつるに、今は皆世におはせず、寫眞よむかへども、いらへなし、哀しき事のかぎりなり。物集君も、故高世大人の後とて、家學の學殖もおそるるものから、あれも、教授に公務に、ひとときあるまじくも思ふるに、總々餘裕ありて、そのわざを遂げられつるもと歎服せざるあらず。近藤君の著と共に、古書を読みわけむるに、裨益多かりかし。「いろは辭典」と、その撰を異にして、通俗語、漢語、多くて、動詞なども、口語のをがたみて擧げられたり。童蒙のたをけ少からじ、三書、おのへく長所あり。おのが言海、あやまりあるべからむど、言ふまでもなし。されど、體裁にいたりても、別におのづから、出色の所なきよしもあるべからじ。後世いかなる學士の出で、辭書を編せむる。言海の體例も、必ずその考據のかたもしに供へすをあらじ。また、辭書の史を記さむ人あらむ。必ずその年紀のかたもしに記しつけすをあらじ。自負のとがめなきよしむらざるけれど、おの事おのれ、おのれ、いたへか、行くをみをかけて信じ思ふとおろなり。



續古今集序

ひよしのふとをも、筆の跡はあらざしへきさみの境をも、宿ながら知ることなし  
あの道あり。まかのみあらす、花と木おきこたきて、うひこ心の山をかさり、露こ  
草の葉よりつもありて、言葉の海である。まことあれど、難波江のあまの瀧汐を汲  
めざめたゆるおとななく、筑波山の松のつま木と、拾ひともあほさせし。

同賀

敷島ややまと言葉の海として拾ひし玉をみがれよけり 後京極

*There is nothing so well done, but may be mended.*

# 言 正 誤 海

頁 段 行 誤

正

二四 上 一五

ス・セ・サ・シ  
セ(規一)

スル・レ・セ  
セ・セヨ(規二)

一六八 上 三三 かうーがんー

かうーぐわんー  
じ(中段ニ入ル)

註東京淺草山谷ナル仰願寺ニテ製ス  
ニ改ム

二三八 下 一 きうーり

きゅうーり  
(其順ニ入ル)

二三八 下 二 きうりーがく

さゆうーりがく  
(其順ニ入ル)

三三三 上 一二 ヨウヒイ

コオヒー(次  
ノ頁ニ入ル)

四三一 下 二 あうーげつ

あゆうーけつ  
ノ條ニアリ

同 下 一八 あうーし

あゆうーし  
(其順ニ入ル)

六八七 中 一五 でうーちゆう

たうーちゆう  
(其順ニ入ル)